魔の刻（とき）

北泉優子

魔の刻（とき）

北泉優子

講談社

魔の刻

定　価　九八〇円
著　者　北泉優子
昭和五十七年二月二十日　第一刷発行

発行者　三木　章
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電　話（〇三）九四五―一一一一（大代表）
振　替東京八―三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
© Yuko Kitaizumi 1982 Printed in Japan
乱丁本、落丁本は小社書籍製作部宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN 4-06-130829-7　（文二）

目次

第一章　ゆれる午後　五
第二章　闇の淵で　一三
第三章　むこう側の女　一五
第四章　赤い黄昏　一七
第五章　静かな火花　二四
第六章　紅い心　二七
第七章　他人の家　一三九
第八章　禁じられた絆　一五九
第九章　炎と魂と　一八三
第十章　ゆきくれて……　二〇六
第十一章　ふたたびの初夜　二二七
第十二章　ふたりの女　二四八
終　章　何処へ　二六六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

魔の刻

裝幀　安彥鵬博

第一章　ゆれる午後

涼子は居間の揺り椅子に座って庭を眺めていた。

外は雨である。眼を凝らさなければ判らない霧雨が、庭の樹々にふりそそいでいる。

亡き姑が丹精した庭の樹は、慈しんでくれた人を忘れずに、いまも瑞々しく枝葉を拡げていた。そぼふる雨に濡れた緑の樹は、どれもいっそう色艶を増してあざやかだった。

垣根ぎわの片隅に、こぶりの金木犀があった。咲き初めたばかりの朱色の小花が、濃緑の葉蔭からこぼれている。かれんな花の群れは、こまかな雨脚に打たれて、かすかにふるえてみえた。

硝子戸を少し開ければ、甘い香がしのび入ってくるだろう。が、涼子は、手を伸ばせば届く間近さだったが、腰を浮かす気にもならず、ただぼんやりと視線をそそいでいた。

柱時計を見あげれば二時、家族三人の家事をやり終えた手持ちぶさたな午後である。

涼子は、このところずっと退屈だった。主婦の仕事はやりかければきりのない無尽蔵だけれど、手を抜きたければまた、いくらでもごまかせるものだ。

身を粉にして動きまわってみても、誰に感謝されるわけではない。夫や息子は、それが当然だと思っている。それに、多少家の中が汚れていても文句をいわないし、心をこめて作った料理を並べて待っていても、二人とも平気で外食を楽しんでくる。張り合いのないことといったら、これ以上はない。

あくせく働いても適当にすませても同じなら、躰が楽なほうがいい。

結婚して二十年余、やっと気づいた涼子は、手を抜くことを知り、さぼることを覚えた。

だから、午前中で家事のほとんどが終ってしまい、午後から夕刻までの時間を持て余す破目になるのだった。

退屈だ。死ぬほど退屈だ。涼子は、毎日のように思い続けてきた。

だが、そのくせ、何か趣味を持つとか、自分だけの楽しみを捜すとかには考え至らず、午後になると、こうやって揺り椅子にへばりついているのである。

「芝居をみるとか、けいこ事をやるとか、買物をするとか、いくらでも時間を使う方法があるじゃないか。おまえの暇潰しの費用に目くじらを立てるほど、わたしは心のせまい男じゃないつもりだ。その程度の余裕は充分あるだろう」

暇だ退屈だと訴える彼女に、夫の慧一朗はいう。

しかし、いまさら頭脳を使う気はせず、出歩きまわるのもなお億劫で、結局、家の中でぐずぐずしてしまうのだった。

せめて息子の深(ふかし)ひとりでも相手になってくれたらと、涼子は思う。

けれど、深は、話相手になってくれるどころか、ろくに口もきいてくれなかった。

そろそろ重役心待ちの慧一朗は相変わらず連日午前様だし、深も出たが最後の鉄砲玉、ひとり取り残された涼子は、どうしようもない孤独と焦燥をかみしめて、じっとうずくまっているほかないのであった。

自分はいったい、なんのために生きているのだろう。涼子は、揺り椅子で時の経つのを待ちながら、つい考えてしまう。

昔は、夫や子供が生き甲斐だった。二人のためなら、どんな献身もいとわない。そんな気概で、同じことの繰り返しの家事が楽しくて楽しくてならなかった。

だが、四十の坂を越えた現在は、家事すらが煩わしく、すべてがとても虚しい。
いっそ、天地が逆転するような大事件でも起こって、何もかも、めちゃめちゃになればいい。そうなったら、自分もふたたび新しい生き甲斐をみつけて、もっと生き生きした日々をすごせるかもしれない。涼子は、ときどき、本気でそれを願っていることもある。
他人は、こんな涼子を、おそらく贅沢だというにちがいない。
超一流会社の秘書室長で重役を約束されている夫と、一浪はしたものの東大をめざす優秀な息子に囲まれて、人並以上の生活を保障されている人妻。退屈だ無聊だとわめいたら、それこそ罰が当たるだろう。
反省することはするのだが、その気持は気持として、やっぱり退屈に変わりはない。
退屈な午後。黄昏までには、まだかなり時間がある。
涼子は、昨日と同じに、気の遠くなるほど退屈な刻を、またすごさなければいけないようである。

「ちょっと出かけるよ。新宿で友達と逢うんだ。帰りは遅くなるからね。夕食はいらない」
ばたばたっと二階から降りてくる足音がしたかと思ったとたん、深はもう揺り椅子の傍に立っていて、用件だけを口早やに告げた。
今春東大受験に失敗した彼は、目下、代々木の予備校へ通っている。が、それも行ったり行かなかったりで、本気で勉強しているのかどうかも判らなかった。
今日も、父親の慧一朗が昨日から一週間の予定で関西方面へ出張したのをさいわい、ずる休みをきめこんだ。
「夕食はいらないって、遅くなるの」

涼子は、ひょろ長い深を揺り椅子から仰ぎ見た。
「十一時までには帰るよ」
「あなたは、夜遊びのできる身分じゃないのよ。もう少しやる気を出してちょうだい。二浪なんて、母さんいやよ。出来が悪いのなら諦めもつくけど、怠けていて二浪じゃ、お父さんだって赦してくださらないわよ」
「うるせえなあ。出がけにぐちゃぐちゃ言うなよ。気分、悪いじゃないか」
ぶすっとした深は、ぷいと横をむいた。
「ねえ深、そのお友達、お断りできないの」
「できねえよ。いまからじゃ、連絡も取れねえしさ」
「そう。じゃ、なるべく早く帰ってらっしゃい。母さん、お夜食を作って待ってるから」
「よけいなことしなくていいよ。さっさと寝てくれよ」
「そうはいきませんよ。お父さんの留守に何かあったりしたら、母さんの責任だもの」
「ちょっと新宿へ行くくらいで、おおげさなこと言うなよな。僕はもう子供じゃないんだぜ」
「だから心配なのよ。あなたはハンサムだから、女の子だって、放っておかないだろうし、変なのに引っかかったら困るもの」
「何いってんだよ。あんたは、いつでもそうだ。話がすぐに飛躍するんだから。つきあっちゃいられねえよ」
小馬鹿にしたように吐き捨てた深は、呼びとめる涼子を無視して、さっさと出ていった。
涼子は、ふっとため息をついて、浮かしかけた腰を落とした。
母親の小言に耳を貸す息子ではなかった。産んで育てあげたほうは、これからもたっぷりの愛情を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

注ぐつもりだが、育てられたほうは、無償の愛をうるさがり、隙あらば払いのけようとしている。
母親なんてつまらないものだ。いかに精根こめて育ててきても、子供は一人で大きくなったみたいな顔をして、平気で母の情をふみにじる。
兆した無常感が、立つ気力を失くさせた。
それに、もうひとつ、これ以上文句をいっては、あの怖ろしい発作が起きる。そういう懸念が心のどこかにあって、あと一拍強い態度に出られなかった。
最近、深は、とみにささくれだってきた。口が悪いのは生来の性格としても、問答無用で暴力沙汰に及ぶことがしばしばある。人に手をあげたりまではしないが、気に喰わないことがあると、突然食卓をひっくり返したり、手に触れたものを叩きつけたりする。
最初は仰天して、あわてて取りすがって阻止をしたが、いまでは嵐が通過するのを息をつめて待つようになった。
その時の彼は、我が子ながら、そら怖ろしくて押えつけられないからであった。
狂気の瞬間の彼は、一匹のけだものだった。だが、激情が去ってしまうと、もとのおとなしい姿に戻り、黙ってこわれ物の後始末をする母親を見下ろしていた。
茫然と立つ彼は、眼も表情もうつろであった。
深の暴力はまだ涼子と二人だけのときに限られていた。父親の慧一朗の前では、あくまでも礼儀正しい息子であり、捲土重来を期して奮励努力する受験生を装っている。
ゆえに、慧一朗は、一人息子が家庭内暴力の徴候をみせているのをつゆ知らない。
そして、涼子も、それをひた隠してきた。
日頃、夫は、涼子にむかい、

「今度も深が入れなかったら、何もかも、おまえのせいだぞ。水尾の一族には、東大へも入れんような頭の悪い奴は、一人もいない。何がなんでも猛勉強させて、二浪なんてぶざまな事態にならんようにするんだ。可哀そうだなどと同情したりしたらいかんぞ。判ったな」

と、高飛車に命じて、我が子のうっせきした感情など理解する気配もなかったからだ。

夫に事の仔細を話しても、おまえの教育が悪いと一方的に叱責されるだけだ。

深は見境いをなくしたわけではない。心得て発散させているのだ。それだったら、いま少し様子を見てから打ち明けても遅くはないだろう。そのうち、気持が落着けば、自然と暴力も収まるにちがいない。

涼子はそう判断をして、できるだけ刺戟しないよう注意しつつ、しばらく様子をみようと我が胸ひとつに畳みこんでいるのだった。

——それにしても、深は、来春、本当に東大を受験してくれるのだろうか。

涼子は、すっかり冷めてしまったコーヒーに手を伸ばしながら思った。

そして、ありし日の姑の頼子を、半ばなつかしく、半ばすがる感じで思い出していた。

姑は聡明な女であった。やれ塾だ、家庭教師だと、深をがんじがらめに縛ろうとする涼子を叱り、妻をそこへ追いこんだ赤門一辺倒の息子の非を糺した。

「子供はね、自分で生きる道を捜し出すものよ。親は黙って見ていればいいの。どのみち、親のいいなりになんぞ、なりっこないんだから」

深が中学三年の時だった。高校へは進学せずに板前の修業をすると口走って、親たちを狼狽させた。その折りも、顔色も変えずにこういって孫の味方にまわった。

幸い、必死の説得が奏功して、深は板前を諦めた。が、それ以後、自分の殻に閉じこもってふた親

には心を開かなくなってしまった。
ほどなく味方だった祖母を失ったことも傷を深くしたのだろう。彼の自閉症的態度は一層ひどくなっていった。
それが高じ、ついに、暴力沙汰にまで進行したのだ。
いったい深は何を考えているのか。親の希望通り、東京大学を目指して勉強をしているが、彼の本心は別のところにあるのではあるまいか。
受験まぎわになって、突如、大学へは行かないと言い出したりしたら、どうすればいいのか……。
涼子は我が息子の心を探りあぐね、途方にくれたり、不安におののいたりしていた。
せめて姑が生きていてくれたら、相談もできただろうし、息子の考えを引き出してもくれただろうに。涼子の思いは、いつでも最後には頼子にたどりつく。
しかし、それでもこの日は、たれこめた暗雲がほんの少し切れた気持だった。
どういう風の吹きまわしか、深が、珍らしく自分から話しかけてくれたからである。いつもは、出かけるのとこっちから訊いて、初めて返事らしきものが返ってくる。
あの様子だと、今日はご機嫌がいいのかもしれない。それなら、こっちも調子を合わせて、少々帰宅が遅れても文句はいうまいと涼子は決めた。
決めたら、急に心が軽くなった。そのせいだろう。豆を挽いて本式に淹れたコーヒーは、冷め切っていたけれども、いつになくまろやかな味でおいしく感じられた。
もう一杯淹れようか。ふと思って立ちあがりかけたのと同時であった、電話のベルが鳴った。
電話は壁ぎわのサイドボードの上に置かれている。涼子はそのまま立って行き、なにげなく受話器を取った。

「はい、水尾でございます」
名のるか名のらないうちに、男の声がとびこんできた。
「水尾慧一朗さん、東和電工の秘書室長の水尾さんのお宅だね」
「そうですが、どちらさまでしょうか」
「名前を申しあげるほどの者じゃないよ。あんた、奥さん？　しっとりしたいい声してるねえ、さぞ美人なんだろうな」
男はふふと笑った。押し殺したような低い声だが、どうやら若い男のようだった。
時折りかかる妙な電話かと早合点をした涼子は、受話器を置こうとして、瞬間躊躇した。
相手はこちらの身分を承知している。どんなに無作法でも、用件を聞き出すまでは、うかつに切れない。そう気づいたからだ。
「あの、ご用のほどは何でしょうか。主人が在宅しておりますので代わりますが――」
「奥さん、嘘つくんじゃないぜ。水尾氏は、社長のお伴で関西へ出張中だ。それに、あいにくだが、ご主人には用がねえんだよ。奥さん、あんたに用がある」
「わたくしに？　いったい、あなた、どなたですか。お名前をおっしゃってください」
「名乗ってもご存知ないさ。言うだけ無駄ってものだ」
「じゃ結構です。どんなご用か存じませんが、名無しの権兵衛さんのお話を伺う義理はございませんから、切らせていただきます」
「ちょ、ちょっと待ってくれ。ずいぶん、気の強い奥さんだな、その奥さんに、耳よりの情報を提供しようと思ってね」
「何でしょうか」

「旦那のことだよ。奥さん、水尾氏に女がいるぜ」
「はぁ、女、ですか」
涼子は間のぬけた声で問い返した。唐突にいわれても、意味が判らなかったのだ。
夫の慧一朗は、仕事ひとすじの石部金吉である。結婚して二十年余が経つが、女で悶着をおこしたことは一度もない。だから、ふいに女がいると告げられても戸惑いが先に立った。
「そう、女。敵は相当の大物だ。二人で勝負したら、あんたの負けだな。奥さん、泣きを見たくなかったら、明日、原宿の『夢屋』って喫茶店にくるんだ。いろいろと詳しく教えてあげるよ。断っておくが、この情報はガセじゃないぜ。俺は吹けば飛ぶケチな男だが、あんたの旦那は天下の東和のエリート社員だ。社長の信望も厚く、出世街道を驀進中だそうじゃないか。色恋沙汰ってのは、うまくはないんじゃないのかい。なにしろ、相手が相手だからな、公になれば、マスコミの格好の獲物になるぜ」
「あなた誰なの。なに、寝言いってるの。これ以上失礼なことをいうと切りますよ」
ねばりつくような男の口調に不快感がこみあげてきて、涼子は荒い声になった。
「とにかく、明日、午後一時、『夢屋』で待ってるよ。なに、こっちで捜すから、奥さんはちょいと早目に来て座っててくれりゃいい。来るも来ないもご勝手だがな、すっぽかしたら、泣きをみるのは奥さんのほうだぜ。相手は、女の意地にかけて、旦那を奪ってみせると高言している。それを忘れずにな」
一方的に喋ると、男はがちゃんと電話を切ってしまった。
涼子は、ただ凝然と、受話器を握りしめていた。
夫に女がいる。あの仕事ひとすじで堅い一方の夫に女がいる。

正体不明の男に吹きこまれた涼子は、動転しすぎたのか、嘘か真実(まこと)かを考えるまえに、すんなりと信じこんでしまった。

躰じゅうがかっと熱くなり、頭に血がのぼった。口惜しさが際限もなくこみあげてきて、平静を保つなど到底できなかった。すぐにも出張中の夫のあとを追い、不実と裏切りを責めなじりたい。涼子は、その衝動を抑えきれないくらいだった。

慧一朗は、妻にとって、けっしていい夫ではなかった。

幼なじみの親友の恋人を横手からもぎとるようにして結婚したのだけれど、二十年余の結婚生活は、幸福そのものとはいいかねた。

もちろん、物質的には恵まれていた。慧一朗はかたぶつの噂どおり、女と悶着を起こしたこともない。だから、表面だけを眺めれば、理想的ともいえる幸福な結婚だった。

しかし、彼と生きた二十年余、涼子の心にはいつでも冷風が吹いていた。

通い合う心というか、夫婦の精神的な絆がなかったからである。

仕事が生き甲斐で、家庭は二の次、いや、専用メイドつきのホテルだと決めてかかっている慧一朗とは、会話らしい会話もなく、談笑とは無縁のままでくらしてきた。

その生活に馴らされてしまうと、今度は対話をしようにもまったくすれ違って、共通の話題さえも見つからない。必要なだけの用件を喋り合うのがせいぜいで、何かをいっても軽蔑のまなざしが返ってくるのがおちであった。

涼子は結婚した日からずっと、慧一朗を心の片隅で怖れていた。

東大出の優秀な夫に馬鹿にされはしまいかと、内心おどおどしてきた。

そのくせ彼女自身、屈指の旧家の出というご大層なものを常にひきずっているせいもあって、せい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo